

第13回 鶴彬のふるさと 「高松歴史街道フェスティバル」

9/14(日)

映画
「ふる」



吉永小百合映画出演
100本記念作品

9月21日(日)
午後1時半
浄専寺にて

- ◆ 第8回「墓碑法要の集い」
開会 午前10時～ 閉会 10時30分
会場 浄専寺
- ◆ 第27回 鶴彬をたたえる集い「碑前祭」
開会 11時／閉会 11時30分
会場 高松歴史公園
- ◆ 第12回「鶴彬」かほく市民川柳祭
- ◆ 第30回 鶴彬川柳大賞「展示&表彰」
会場／高松産業文化センター大ホール
午後2時～5時
入賞・入選作品はフェスティバル会場に
鶴彬の句と共に行灯で展示
・表彰式前「はまなすコーラス」と
「高松少年少女合唱団」の合唱

9/15(月・祝)

- 会場／高松産業文化センター大ホール
- ◆ 「でえげっさあ」コンサート
(白山市のフォークグループ)
- ◆ 冬のト(ふゆのぼく)氏 講演
講題「鶴彬と大阪を歩けば」



冬のトさん
大阪あかつき
川柳会代表

折り鶴も集まりました。

フォークグループ
でえげっさあ

はまなすコーラス



通信 鶴彬

はばたき

「鶴彬を顕彰する会」



第49号

2025年 9 月 1 日

鶴彬を顕彰する会

もくじ

- ② 3面 鶴彬川柳大賞 応募者100名増／第13回「鶴彬のふるさと歴史街道フェスタ」
- ④ 5面 新連載「なのおににいる鶴」
- ⑧ 13面 読書リレー(第十一回) 武田裕一
- ⑭ 15面 第十八回「戦争体験に学ぶ会」即生寺
- ⑯ 17面 千羽鶴を能登へ、鶴彬のパネル展
- ⑰ 18面 鶴彬の名前の由来 寺内撤乗
- ⑲ 20面 鶴彬資料室「蔵書紹介」その①
- ⑳ 21面 財政の現状報告、編集後記
- ㉑ 23面 鶴彬・交流の広場

後援：かほく市・かほく市教育委員会

鶴彬川柳大賞 応募者100名増

第13回「鶴彬のふるさと 歴史街道フェスタ」

— 順調に進行中 —

今年最大の企画「鶴彬川柳大賞30周年記念大会」の応募者が、昨年より100名上回る261名になり、嬉しい悲鳴を上げています。

今年も6名の選者により厳正な選句がなされますが、はたしてどんな句が選ばれるのか、今まで以上に期待と注目が高まっています。

また「30周年記念大会」では特別賞として6名の選者賞が用意されていますので、それにも皆さんの関心が集まることでしょう。

受賞句の発表は9月14日の第27回鶴彬をたえる集いの「碑前祭」で例年通り行われます。

第12回市民川柳祭の応募状況は次の通りです。小学生の部515名964句、中学生の部316名611句と順調ですが、一般の部は8月末日が締切りのため現在のところ応募数が少ない状況です。現在、小学生の部は高松川柳会、中学生の部は七塚川柳会が選句中です。

尚、今年の最優秀賞と優秀賞および佳作賞の受賞者には、特別な副賞が付きまします。本人かご家族の方でなければお渡し出来ませんので、予めご了承ください。



今年も鶴彬川柳大賞が30周年を迎えることや戦後80年という節目の年でもあることから、テーマを「平和への願いを込めて」として出発しました。

その活動の中心として、折り鶴＝千羽鶴をみんなで作り、思いを一つにすることを考えました。この折り鶴の活動は8月いっぱい続きますが、びっくりするほど沢山の方々に参加協力をいただいています。

その様子は毎月発行している「折り鶴通信」に載せています。

千羽鶴は現在35本（3万5000羽）作られ、たかまつ交流館1階ロビーに飾られています。最終的には40本を超える素敵な千羽鶴がフェスタ会場に飾られることはもう間違いないありません。

実はこの千羽鶴は、能登半島地震の被災地支援活動にも役立てられています。私は2年目となる被災地へ月2回のペースで炊き出しのお手伝いに鶴彬を顕彰する会として参加しています。すでに4か所の集会所に千羽鶴を持参し喜んでもらっています。メッセージカードには「がんばろう能登心は一つ」と記し、共有の思いが伝わることを願って贈呈に臨んできました。

8月9日（土）午後1時30分から佐々木禎子さんの紙芝居「原爆の子」をたかまつまちかど交流館1階「折り鶴教室」にて初披露しました。被爆した禎子と折り鶴の物語は、紙芝居とは言え胸が熱くなりました。語りは紙芝居歴20数年の越野正勝さんでした。





「たかまつ少年少女合唱団」所属の3人の少女たちが鶴を折ったり、「折鶴」の歌を披露してくださいました。

たかまつまちかど交流館1階広場にて、越野正勝さんによる紙芝居「原爆の子」と「たかまつ少年少女合唱団」所属の3人の少女たちの「折鶴」の歌を熱心に聴く皆さん。



高松少年少女合唱団の皆さん
(場所は浄専寺本堂)

●9月14日(日)は午後2時から、高松産業文化センター大ホールにて、「鶴彬」かほく市民川柳表彰式を開催いたします。
今年は表彰式の前に「はまなすコーラス」と「高松少年少女合唱団」の出演を予定しています。

はまなすコーラスの皆さん
(場所は浄専寺本堂)



てえげっさあの皆さん(場所は浄専寺本堂)

●9月15日(月・祝)は午後2時から、高松産業文化センター大ホールにて、白山市のフォークグループ「てえげっさあ」のコンサートと冬のト(ふゆのぼく)氏の講演「鶴彬と大阪を歩けば」を開催いたします。
なお、9月14日、15日ともに、折鶴を折るワークショップの開催を予定しています。

新連載 「なお闇にいる蕾」

「はまなす通信」より

今年が高松少年少女合唱団に9月14日(日)午後2時から高松産業文化センター大ホールにおいて歌っていただく予定ですが、その合唱団の主宰者は櫻井晴美さんです。

櫻井さんは「浜防風」というペンネームで『はまなす通信』(北陸中日新聞・かほく北販売店・麻生新聞店発行)に「なお闇にいる蕾 戦後80年 節目の年に 川柳人鶴彬の願いは」という連載をしておられます。

8月20日現在、「なお闇にいる蕾」は、「はまなす通信」Vol.206(5月11日発行)、Vol.207(6月8日発行)、Vol.208(7月13日発行)、Vol.209(8月10日発行)に掲載されています。



はまなす通信 (Vol.206~209)

なお闇にいる蕾

①

高松まちかど交流館の3階に「まちかど郷土資料室」があります。公共施設の中にあっても、運営・展示などはすべて一般有志の手で行われています。10年以上前に開設され、交流館のリニューアル時などに模様替えをして、現在の形になりました。実は浜防風、この模様替えの折に、たまたまその現場に居合わせたのです。そして3階までの階段を使い(エレベーターがない!)、書棚が何か大きな物を数人がかりで運び上げる様子を目撃したのです。この5分程度の光景がなければ、「資料室の運営面に大きく関わってらっしゃる」鶴彬を顕彰する会」の方々への印象は、全く違っていたかも、と感じます。

失礼ながら「一銭の得にもならないことに、よくこのように汗水流されるものだな」が正直なところでした。実際暑さで大変そうで、人生の先輩方もいらしたから、作業は休み休み。半分呆れるような思いが、尊敬の念に変わるのに時間はかかりませんでした。

資料室、歴史街道フェスティバル、映画「鶴彬 こころの軌跡」、会報発行など、必要に応じて他団体と連携しながらの活動は多岐にわたります。今年は戦後80年、そして「鶴彬川柳大賞」が30周年となることから、9月にはさらに熱をこめた催しが企画されています。

本通信では数回にわたり「鶴彬を顕彰する会」「鶴彬」がらみの情報を発信していきます。鶴彬が命懸けで訴え、一生懸命な方々の心

の中に生き続ける反戦・平和への願いを、ささやかながら側面支援していけたら、と。まず今回は(予定通りに発行できましたら)ちやうど明日から募集を始める「第12回『鶴彬』かほく市民川柳祭」作品募集のお知らせをご覧ください。はまなす川柳で磨いた腕前で!是非ともご応募を! (人を動かすのは真実と感動)と固く信じてやまない 浜防風)

なお闇にいる蕾

②

そもそも今回 鶴彬に関する事柄を通信で発信していけたら、と思ったのは、前号でお知らせした鶴彬を顕彰する会さんの発行する機関誌「はばたき第48号」に掲載された一文がきっかけ。

「鶴彬から読み解く日本の歴史」と題したA4十数ページにも及ぶ文章を書いたのは、なんと高松中学1年生(執筆当時)。昨年の「図書館を使った調べる学習」コンクールでかほく市の優秀賞に輝いた作品を転載したものです。

浜防風があれこれ解説するより、本当は皆さまに全文を読んで頂きたい(顕彰する会HPからご覧頂けます)です。時代背景を踏まえた鶴彬の生涯はもちろんのこと、顕彰する会の代表者や鶴彬の甥へのインタビュー、鶴彬の句への率直でみずみずしい感想など、イラストや写真を取り入れた力作です。

一番唸らされたのは、まとめというかめとしての「⑮感想」の部分。戦争を正当化していた世の中の流れを良く理解されたうえで、「鶴彬はなんで洗脳もされず、同調もしな

かったのか不思議だと思いました」と爽やかに結んでいます。

「自由で民主的」なはずの令和の世。しかし同調圧力が増して、何となく物を言いづらく感じるのは浜防風だけでしょうか。今こそ大事なポイントを突いているように思ったのです。

で、突撃取材（いい年して人見知りの浜防風を動かすとは、相当の感動だとして理解頂けますでしょ♡）いたしましたよ。その結果はまた次号にて。（「人を動かすのは真実と感動」と固く信じてやまない 浜防風）

なお間にみる蕾 ③

さて突撃取材。小心者で人見知りの浜防風、ドキドキしながら鶴彬に関する力作作者のおうちのインターホンを押しましたよ。

ご本人はお留守でしたが、アポイントなしのいきなりの訪問にも関わらず、お父様にご対応頂きました。

機関誌掲載の作品にとっても感銘を受けたこと、はまなす通信で取り上げさせてほしいことを、しどろもどろに伝えました。そのうえで、

・時代背景に関してお父様がサポートされたが、あとは一人で作ったこと

（顕彰する会で尽力されてるお父様の関りは、やはり気になるところでした、すみません）

・夏休み期間中に作ったこと

（あれだけのものがひと月あまりで？と、失礼ながら要した時間を聞きました♡）

などを伺い、あらためて「なんて素晴らしい

子がかほくにいるのだろうー！」と驚きました。

最後には是非聞いてみたかったこと、「なぜ鶴は時代に流されずにいられたのか？」について、ご本人のお考えをお父様経由で聞いて頂き、後日お返事頂きました。

「鶴彬はそんなタイプの人だった」とのご意見を詳しくいうと、

「みんなが当たり前だと思っていることに対して、疑ってみるものの出来る人だった。そして正義感が強かったので、黙ってはいられなかった」

とのこと。「なぜそれができたのか」についてを、お父様が補足され、

「幼少期から読書家で、文学のみならず政治哲学や世界情勢にも興味を示し、広範な視野と豊富な知識から、自分で考えることができたのでは。そのような知識人は進学してエリートコースを進むと国家や大企業の組織に組み込まれる。また家庭を持つと保身を考える。鶴は進学できず、貧乏で不安定な生活をし、守るべき家族もいなかった。川柳を武器に国民に向けて真実を訴えかけ、戦争へ突き進む世の中の現状を何とか阻止できないかともがいていたのでは（一部省略あり）」と解説。目の前の過酷な現実と、頭の中の理想の世界。たった一人で何ができる、なんてことを思わずにひたすら突き進んだのだですね。

戦後80年の今、自分ができることは？以下次号にて。（「人を動かすのは真実と感動」と固く信じてやまない 浜防風）

なお間にみる蕾 ④

鶴彬の思いを受け止め、今何ができるのでしょうか？

生来の気の短さから、毎日小さな戦争を繰り返している身には、世界の平和を願う資格が、まずありません。また、世の不条理、理不尽を感じても、相手が大きすぎると、振り上げた拳を力なく降ろしてしまします。若い頃の気力がなくなってしまうたのですね。

困ったなと思っていたところ、「これならできるかも？」の情報を見つけました。

鶴彬の「鶴」にちなんで、たかまつまちかど交流館で千羽鶴を折る催しがあるのです。主催は例の顕彰する会の皆さま。今年に入ってから月2回ペース（基本第2・4土曜日午後1時半から4時まで、飲み物代400円必要）で開催され、能登半島地震の仮設住宅へ完成品を届けたりもされているようです。折り紙は会で用意されています。どなたでもご参加頂けるとのこと。

今まで作られた折り鶴を、まちかど交流館でいつでもご覧頂くことができます。それはまあ見事なものです。たくさんの手と思いがあつて、これだけのことができるのだな、と光のようなものを感じました。あえて言葉にするなら「希望」でしょうか。「折り鶴に寄せて」との詩、また「折り鶴通信」も、置かれていましたよ。（本通信発行前の9日に参加し、禎子さんの「原爆の子」の紙芝居を見ているはずの 浜防風）

新連載

「鶴彬と大阪を歩けば」

＝冬のト(ぼく)＝

新連載「鶴彬と大阪を歩けば」が始まります。著者は、高松歴史街道フェスティバル2日目の9月15日(月)に「鶴彬と大阪を歩けば」という講題で講演いただく川柳作家の冬のトぼくさんです。冬のトさんは今年一月に、大阪のあかつき川柳会の4代目会長に就任されました。

あかつき川柳会は2000年6月に設立された会で、大阪市天王寺区玉造に事務所を置いて活動しています。活動方針として『鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会風刺の精神を現代に生かし、川柳の普及と向上に努めることを目的とする』を掲げています。2008年9月に大阪城公園内に鶴彬顕彰碑を建立。毎月第2金曜日に定例会を開催し、毎月1日に会報誌「あかつき」を発行しています。実は新連載の「鶴彬と大阪を歩けば」はあかつき川柳会の会報誌「あかつき」からの転載です。「鶴彬と大阪を歩けば」の連載は、2022年7月202号から2023年6月213号の1年間です。連載開始時は、発行責任者は

岩佐ダン吉さんで編集人は塩田鮎子さんです。2022年11月号からは、発行責任者は加山勝久さんで編集人は塩田鮎子さんです。では、冬のトさんのプロフィールをご紹介します。

〈冬のトさんプロフィール〉

元冤罪被害者で川柳人。1995年から2015年までの20年間、無実の罪で獄中に捕らわれの身となり、2015年10月26日に釈放され、逮捕以来7352日振りに自由の身となる。2018年8月に再審無罪判決が確定。釈放される約3年前の大分刑務所で受刑中に、支援者であかつき川柳会の幹事の女性から川柳活動のお誘いがあり、鶴彬とあかつき川柳会について知る。約半年後の2013年2月にあかつき川柳会に加入し、同人となる。2019年6月に幹事に就任。2025年1月に4代目会長に就任。柳号の「冬のト」の由来は、大分刑務所で無実の受刑者だったころ、獄中の文芸紙に「雪のト」で俳句を投句したら「冬のト」で誤記載されたので、そのまま使用。柳歴13年。

次の川柳は、冬のトさんの獄中時代の代表作です。

無実でも拒めぬ獄の飴と鞭

冬のト

はばたき第47号には、冬のトさんからいただいた手紙も掲載しています。

鶴彬と大阪を歩けば ①

冬のト

第二次大阪大空襲があった6月1日にピース大阪へ行ってきた。

戦後生まれが85%以上の現代、殆どの人が大阪に大空襲があったことを知らない。自分ですらイメージを掴めない。ピース大阪で写真を見ると、想像を絶する廃墟の波を目にして、言葉を失う。露島戦争でウクライナの街の凄惨な被害のニュースを見て、我が町が破壊されるとはどういうことなのか。その一端を垣間見ることができた。

戦後77年、幸いにも日本では戦争が起きなかった。しかし、世界では戦争が起き、それを政治の道具にしていたりする。国際法など在于て無いがごとの振舞い、一般市民の切なる願いをよそに早期停戦の努力を怠る両陣営。その犠牲になるのは、常に民間人だ。

不幸にも戦争が起き、戦況が混迷を深めると、簡単に攻撃が民間人にまで及ぶ。戦時下でも民間人保護に最善を尽くすという近代国際法が定着した現代においても簡単に民間人を攻撃する状況は太平洋戦争当時と変わらない

いことを、露島戦争でも露わとなった。
鶴彬の心象は、当時、どのようなものであったろうか。鶴彬が甦ったら、露島戦争を見て何と叫ぶであろうか。

正直に働く蟻を食うけもの

鶴彬

戦争を回避する努力を尽くさないといけないのは当然。それでも不幸にも戦争が起きたならば、民間人避難を最優先にすると同時に、早期停戦に最善の努力を尽くす責務が両陣営にある。



空襲の惨劇と焼夷弾

鶴彬と大阪を歩けば②

冬のト

母校の今宮工業高校は、あいりんセンター

の近くにある。40年前の高校生時代、このあいりん地区は、日雇いの労働者で活気があった。

当時、写真のあいりんセンターでは、建設作業等の日雇いの労働の仕事を紹介し、最底辺の労働者を支えていた。ホームレスも少なく、最底辺の労働者の社会の縮図があった。人夫出し事業を営む暴力団の関係企業も少なくなく、労働者から搾取しているという批判の声も少なくなかった。

あれから40年経って、久し振りにあいりんセンターを見に行くと、廃墟同然となっていた。



あいりんセンター

建物が老朽化し、耐震性にも問題があるのは、外観からでもわかる。建て替え工事の計画があり、賛否の議論がぶつかり合って、計画は進んでいない。現在、南海高野線高架下に西成労働福祉センターが仮移転して、事業を継続している。

こうした人材を紹介する事業を行うには、その事業者は手数料的な金額を差し引いた上で、仕事を斡旋するのが一般的だ。問題は、差し引く金額が適切かどうかである。派遣労働者が激増した現在、派遣会社が花盛りで、あいりん地区の現状とは対照的だ。

その派遣会社では、仕事を斡旋するときの中抜き率が、事務系が15〜20%なのに対し、技術系が30〜最大50%にもなるという。あいりんセンターも目を剥くビックリ仰天のピンハネ率だ。専門職の派遣労働者は高い時給をもらうが、一般派遣労働者の時給は1000円前後で交通費が出ないケースも少なくない。この実態が、派遣労働者のワーキングプアを生み出している。

搾取した金を貰うてゐるダラ幹 鶴彬

鶴彬が見てきた搾取の構造が、姿を変え、形を変えて、派遣労働の構造にゾンビとして棲息しているように見えてならない。

読書リレー(第十一回)

武田 裕一

1 『増補版 賃金破壊

労働運動を「犯罪」にする国』

竹信三恵子たけのぶ みえこ 旬報社

以下()の小題は私がつけたものです。

また(※)は私の注です。

(関西生なまコン事件)

(P355)

二〇一八年七月、近畿二府二県(※滋賀、和歌山)の警察が出勤し、生コン運転手らの労働組合「関西地区生コン支部」(関生支部)での多量の逮捕が始まった。企業を横断した業界一斉ストライキなどの組合活動を、威力業務妨害などの「犯罪」と見立てた「関西生コン事件」の始まりだった。逮捕された組合員は延べ八一人にのぼり、うち六六人が起訴、という規模の大きさにもかかわらず、このできごとは、マスメディアからはほぼ黙

殺されてきた。(中略)

この国には、懸命に働いても賃金が上がらず、人間らしい生活が送れないことを固定化する「仕掛け」のようなものが張り巡らされている、(中略)

関生支部という労組は、そんな目に見えない仕掛けを跳ね除ける労働運動を現場からの創意工夫で実行し、そうした仕掛けをあぶり出す役割を果たしてきた。大量逮捕は、力でそれに蓋をしようとした。

ただ、いま、事件は大きな転回を見せつつある。裁判では無罪確定が相次いでいる。遠巻きにしていた人々も「これは変なのでは」とあやしみ始め、映画やテレビでのドキュメンタリー番組も放映された。そんな反転を生み出したのは、おかしいことはおかしい、と無罪を主張し続けてきた組合員たちの踏ん張りであり、労組での連帯の記憶に支えられたこの人たちの明るさと一種の「痛快さ」だったと思う。(中略)

関生支部の組合員たちが直面したものは、私たちにとって身近で日常的なものに転化しつつある。

一つが、事件の前段で起きた、ヘイトグループによるフェイク情報のばらまきだ。そ

れが組合のイメージを落としてその反論を封じ込め、メディアの敬遠を作り出した。

二〇二四年の衆議院選挙や兵庫県知事選では、こうしたSNSという道具による情報拡散の危うさが、前面に躍り出た。

二つ目が、逮捕後の組合員に対する警察・検察の取り調べの異様さだ。そこでは、事件の究明より、組合からの脱退に迫り込む極端な長期勾留が行われた。当時、そんなこととはあるはずがない、と言われ続けたこの行為は、この間、他の事件で「人質司法」として注目され、取り調べ録画などを通じた取り調べの可視化が進みつつある。

三つ目が、物価高の中での賃金の低迷と生活苦の深化の中でのストライキなどへの支持の高まりだ。たとえば二〇二三年の西武百貨店ストは世論の共感を呼び寄せ、生活防衛へ向け、ストを辞さない労組がその後、相次いでいる。

※関西地区生コン支部(関生支部)とは生コンクリートを建設現場に運ぶ運転手などを組織する「全日本建設運輸連帯労働組合」を縮めて「全日建」と呼ばれることもあり、愛称風に「連帯ユニオン」と呼ばれることもある。そんな「連帯ユニオン」のメンバーのう

ち、大阪、滋賀、京都、和歌山などの近畿地方の生コン企業の運転手らが加入するのが「関西地区生コン支部」略して「かんなんま関生支部」

（企業別労組と産業別労組）

（P 23）

労組には企業ごとの「企業別労組」と、産業全体をカバーする産業別労組（※産業別労組）がある。日本の労組の大半は企業別労組が基本単位だから、産別労組は、個々の独立した企業別労組のネットワークのようなものが少なくない。一方、海外の産別労組は、日本のような企業別労組の集合体ではなく、業界内の労働者が直接加入するのが基本だ。労働者は、この産別労組を通じて、雇用されている企業の経営者たちや業界内の経営者集団と交渉することになる。

連帯ユニオンは、セメント、生コン、砂利などを建設現場に運ぶ運転手や、クレーンなど重機のオペレーターが個人で加入する全国規模の産別労組である。関生支部はその中心的位置を占める支部だ。

個々の運転手らが企業を越えて直接加入する連帯ユニオンや関生支部は海外の産別労組に近い。日本社会では珍しい国際基準の産別

労組とっていい。ちなみに日本の労働組合法では、企業別も産別も労組として認められている。

（P 27・28）

日本では先に述べたように、ほとんどが企業別労組だ。ここでは、「ほかの企業との競争に負けるから待遇改善は無理、負けたらお前の仕事もなくなる」と言われ、そうなる」と、労働者はモノを言いにくくなる。業界全体が同じ労働条件で働くことになる産別労組では、そうした企業側の言いわけは通用しない。同一労働同一賃金も保障されやすい。

（P 34）

企業別労組では、企業間の競争を理由に、子育てもできる労働時間の確立を置き去りにしがちだ。その結果、シングルマザーは「お荷物」扱いとなる。言いわけとして、「子持ち女性は生産性が低い」「だから安くても仕方ない」という社会の偏見が、フルに利用される。

（P 33）

（※関生支部は、）安値労働に依存するのでなく、労組の監視を通じて業界全体で労働時間の順守を励行し、質の高い労働を担保する方向へと、ストも交えて会社を説得し、

一九九四年に隔週週休二日制が実現した。「シングルマザーが自立できる労働条件」は、それらの積み重ねの結果だった。

（労働運動が「犯罪」になった）

（P 53）

ストや労使交渉といった労働基本権が保障する労働者の組合活動が、次々と、「暴力集団による刑事事件」へと読み替えられ、有罪にされるという事態が展開されていくことになる。

（P 137・138）

（※関生生コン事件では、労組の活動に対して「指示・計画」したトップが実際に逮捕された。）それを可能にしたのが、先に述べたような、労組の活動を「暴力団の手法」に置き換え、労働用語をひとつひとつ暴力団の用語に置き換えていく方法だ。そこでは、「環境整備費」「解決金」が、「みかじめ料」になっただけでなく、労働基本権の行使が「金品獲得のための嫌がらせ」となり、ストなどについての労組の決定は、武委員長という「組長」から末端「組員」への指示となり、罰せられるべきは現場にいなかった委員長、ということになる。

(ストライキは迷惑?)

(※二〇二〇年二月一五日、国際人権法研究者の申^シ 惠^ホ 豊^ホ・青山学院大教授 「検証シンポジウム『関西生コン事件』を考える」で)

(P 246)

申の説明のなかで特に印象に残ったのは、「ストライキは業務を止めて、いわば相手に迷惑をかけるということで成り立つ行為」と言う言葉だった。「迷惑をかける」ことで成り立つ行為について人々が「迷惑」と切り捨てたら、ストをする意味がなくなってしまう、というのである。実際、フランスなどではストライキは頻発しているが、国民はそれを受け入れている。日本人は、幼いころから「迷惑をかけない」ことばかり教え込まれ続け、何が自分の権利なのかを意識できなくなっている。権利を守らせる行動を起こさないと、悪い前例ができて、権利は消滅してしまう。だからフランスの人々は残業を禁止する規定があるなら自身も残業を断るなど権利を行使することは義務だと考える、というのだ。

その意味で、関西生コン事件は、「労働基本権への義務の観念」を呼びましたといえるかもしれない。それは、労働法研究者たちの危機感に火をつけて「声明」を誘発し、メ

ディアに関わる者たちの責任を問い、国賠訴訟を通じて「本気の労組」への国の対応を白日の下にさらし、さらにゴーン元会長などへの「恣意的拘禁」に対する国際的な注目にも押されて、忘れられかけていた産別労組についての理解の扉を押し開けつつあるのではないのか。「賃下げ国家日本」の真ん中で、私は、さびついたその扉が、きしみながら開きかける音を聞いたような気がした。

(P 263・264)

この事件(※関西生コン事件)はまず、どこかの「ステキなよその国」でなく、私たちの社会にも、働きにくさをしっかりと押し返してきた労組の活動があるということを教えてくれた。さらに、そのための強力な武器である労働基本権を「犯罪」に作り替えていくための周到な詐術が、営々と続けられてきたことも、教えてくれた。

日本での過労死をもたらすような長時間労働や、貧困に直結する低賃金は、この詐術によって、多くの労働組合がまるで会社の中の「部」や「課」のように押し込められてきたところから来ている。それなのに私たちは、「日本人は働くのが好き」「低賃金でも我慢して働く奉仕の精神が素晴らしい」と、思わ

され続けてきた。

この本は、そうしたからくりを解き明かしかたくて書いた。

②『愛と連帯

非正規労働者、国会へ』

大椿ゆうこ 地平社

〔フリーターは無職といっしょ〕

(P 13)

「(※お姉ちゃんは)『フリーターは無職といっしょ』と言うけれど、お姉ちゃんの会社にもパートやアルバイトの人はいるよね? 正社員だけでは仕事が回せないから、会社はその人たちを雇っている。本来であれば正社員で雇うべきところを、非正規雇用で雇うことにしたのは会社の都合でしょう? だったら会社の問題じゃない?」なんて、非正規雇用だからって、ちゃんと働いている人たちのことを蔑むの? その人たちが働くことで、お姉ちゃんの会社は回ってんだよ?」そう言葉にできたのは、あの出来事からしばらく経ってからのことだった。いま振り返ると、このときの体験が、私が非正規雇用の矛盾に向き合う最

初のきっかけだった。

(生きていた労働組合―次の勝利のために)

(P 158)

私は障がいのある学生の就学支援コーディネーターという仕事をしていましたが、上限4年の有期雇用を理由に雇い止め解雇されました。

(P 29)

2009年2月、もう一人のコーディネーターとともに、大阪市・天満橋にある教育合同(※教育現場の労働者なら誰でも一人から加入できる労働組合、大阪教育合同労働組合)の扉を叩いた。

相談に乗ってくれた組合のYさんは、3時間も私たちの話を聞きつけてくれた。そこで彼がこう言ったのだ。

「有期雇用をおかしいと思う大椿さんの直感の間違っていませんよ」

初めてだった。そんなことを言ってくれた人は。親にも姉にも、職場の上司にも友人にも、「今さら文句を言うあなたがおかしい」と言われつづけてきた私は、自分の違和感に確信をもてないでいた。Yさんのこの言葉に、私は心から救われた。

話を終えて立ち上がると、扉を開けてくれたYさんが、またしてもこんなことを言った。「大椿さんのときには勝てないかもしれない。でも次の人のときには勝てるかもしれない。それが労働運動だからね」と。その瞬間、バキューンと胸を打たれるような衝撃を受けた。「かつこいい！私も闘いたい！」と心が叫んだ。労働組合に入って闘おう、ほぼ気持ちが高まった瞬間だった。

(初めての団体交渉)

(P 32・33)

私は初めての団体交渉に臨みながら、「ああ、これが憲法28条が言うところの団体交渉権か！」と感動した。

だが、数回にわたった団体交渉のなかで、大学側からは数々の冷たい言葉を浴びせられた。なかでも印象に残っているのは、常任理事が言い放った「有期雇用は自己責任」という一言だった。その一言に、団交に参加していた組合員らがいっせいに抗議しはじめ、場は紛糾した。私のために怒りをあらわにする仲間の姿が心強かった。常任理事が言い放った「有期雇用は自己責任」という言葉は、本当だろうか。障がい学生支援コーディネー

ターという仕事を有期雇用としたのは関学だ。それで人を募集しておいて、異論を唱えた者には「有期雇用を選んだのは自己責任」だと突き放す。あまりに自分勝手ではないだろうか。

(分断)

(P 35)

私たちの代わりに公募で採用された一人は、一緒に働いていたアルバイトの女性だった。公募の条件が、私の採用時に比べて緩和されていた理由に合点がいった。関学は、最初から彼女を採用することを前提に公募をかけたのだと気づいた。「一緒に働いていたアルバイトなら、仕事内容もわかるだろう」と考えたのだろう。立ち上げから関わったコーディネーター二人が一気にいなくなることに不安があったことが垣間見える。そんなに不安なら、私たちを継続雇用しておけばいいのに。採用された彼女を責める気はない。ただ、共に働いていた同僚との間に、平気で分断を持ち込んでくる男たちのこのやり方に怒りを覚えた。有期雇用の問題点の一つは、このような恣意的な人事がまかり通るところだ。

(争議で培った力)

(P 38 ~ 40)

私の労働争議は3年9月かかり、大阪府労働委員会に続いて中央労働委員会でも棄却され、2013年に終結した。結局、私は職場に戻ることはできなかった。

だが、この過程でたくましさを培った。とことん闘った私が感じたのはさすがしさだった。それからは教育合同の専従役員として、本格的にさまざまな労働相談に関わることになった。

私は主に、私立大学・民間で働く非正規労働者の相談を担当した。非正規労働者の中心は女性だ。それゆえに、女性たちの労働争議を担当することが多かった。団体交渉を前に、緊張した組合員が、「私、何も喋れませんかから大椿さんにお任せします」とうつむく。「わかりました。でも話したいことがあったら言ってください」と彼女たちに伝える。かつて私がYさんからそう言われたように。緊張でただただ黙っている彼女たち。解雇しようとする使用者は、いかに彼女たちに問題があるか、あることを饒舌に語りだす。すると、彼女たちの表情が徐々に変わり始める。そして、スクツと背筋を伸ば

し、怒りを滲ませながら、もう我慢できない、とばかりに、怒涛の反論が始まるのだ。

私はその瞬間が大好きだ。「今、この人は自分の権利と尊厳のために立ち上がったんだ」、そう感じる瞬間に間近で立ち会えたとき、私は労働運動の醍醐味を感じる。(中略)

私は勝つことはできなかったが、その闘いが新たな闘いを支え、勝利を導いている。つまりこれが労働運動なのかもしれない。

(国会議員に—労働問題にこだわる)

(P 51)

(※2019年の社民党参議員全国区比例名簿の繰り上げ当選により) 2023年4月7日、私は参議院議員になった。クビを切られた非正規労働者が、ついに国会議員になった。

(P 53)

自分がクビを切られた非正規労働者だったとき、政治に対していろいろな疑問や怒りが渦巻いていた。なぜ政府は、ここまで非正規労働者を増やしつづけて平気なのだろうか、なぜいつも、就職氷河期世代への支援は中途半端なままなのか。少子化、少子化というけれど、非正規労働者を増やしつづけていたら

そうなるのは当然だ。少子化の最大の要因は、非正規雇用の拡大に決まっているだろう。

(P 61)

正規雇用であれ非正規雇用であれ、立場の弱い労働者がどれほど不条理な扱いを受けているのか。それを可視化し、国にただすのが私の使命だと思っている。労働者の使い捨ては絶対に許さない。私はこの一議席を、徹底して労働者のために使うつもりだ。

(P 88・89)

私が国会のなかで一番やりたいことは「非正規雇用の入口規制」を法制度化することだ。労働契約法18条は、同じ職場で5年を超えて働く有期雇用労働者は、本人の申し出によって無期雇用に転換できると定めている。使用者側はそれを断ることはできない。このように正規者を無期雇用に転換することを「出口規制」という。(※雇用期間を迎える直前に契約更新を打ち切る「無期転換逃れ」があり、有期雇用契約のルール撤廃を求める動きもある)

しかし、この国に「入口規制」がない。そもそも非正規労働者を増やさないための方法がないのだ。その結果、本来は正規で雇うべき恒常的な仕事を非正規雇用にしている。公

務職場で働く会計年度任用職員（1年単位で雇われる非常勤職員）がよい例だ。その仕事をアルバイトで雇うのか、パートで雇うのか、派遣で雇うのか、その判断は使用者側が握っている。これでは非正規労働者の拡大に歯止めをかけることはできない。

・パタゴニア争議原告の藤川瑞穂さんの言葉

「働くための入口は有期雇用契約しかない。それなのに、あなたの自由でやった契約ですよ、って言われるのは、ものすごい欺瞞だと思う」（P 159）

・ライター和田静香さんの言葉

「非正規・有期雇用というのは、『選択させられている』んですよ」（P 185）

（弾圧される労働組合―関西生コン事件）

（P 113）

「国会議員になって良かったなー！」としみじみ思うことがある。厚生労働委員会に所属していることもあって、ガンガン労働問題について質問ができるからだ。関生支部への不当弾圧についても質問をした。

（P 117）

関生支部は強力な運動を展開してきたが、決して労働運動として特異な存在ではない。

むしろ欧米の水準で言えば産業別労働組合として、労働運動の王道を歩んでいたと言っている。悪いことなど何もしていない。裁判で無罪判決が続いているのは当然だ。だからこそ、声を大にして、この弾圧のおかしさ、異常さを追及していかなければいけない。そうでなければ、憲法28条で定められたはずの労働三権（※ 団結権・団体交渉権・団体行動権）を、私たちは失ってしまうかもしれないのだ。

（戦後責任を果たす―長生炭鉱の歴史を刻む）

（P 131）

私が長生炭鉱の問題にこだわっているのは、これが労働問題だからだ。外国人なら何をしてもいい、どんな過酷な仕事をさせてもかまわない、死んでも知ったことではないという日本の姿勢は、現在の奴隷労働と言われる外国人技能実習制度に引き継がれていると思うからだ。強制労働の歴史を総括していない結果が、今に続いている。私はそれが許せない。憲法28条はすべての「勤労者」がその対象だ。私は国籍や人種を理由に差別されることを許さず、すべての労働者の権利が守ら

れる社会をつくりたい。

（国会には当事者が必要）

（P 202）

でも、「私はこの社会から大切にされなかった」って思っているほしくないんです。非正規雇用労働者や女性たちに。だからこそ、国会には当事者が必要だと思うんです。非正規雇用を経験してきた当事者が。解雇を経験してきた当事者が。女として生きづらさを感じてきた当事者が。女性議員をもっと増やすことで、女性の抱える問題に取り組む人を増やすことができると思うんです。

（P 207）

私たち労働者は、もっと大切にされなければならない。労働者を使い捨てにする政治を終わらせるために、私は、これからとことん闘います。

※大橋裕子さんは2025年7月の参院選で社民党から全国区に立候補しましたが、59279票獲得するも社民党二人目の議席獲得はなりませんでした。しかし、これからも働く人たちの使い捨てを許さない闘いは続けると思います。

第十八回

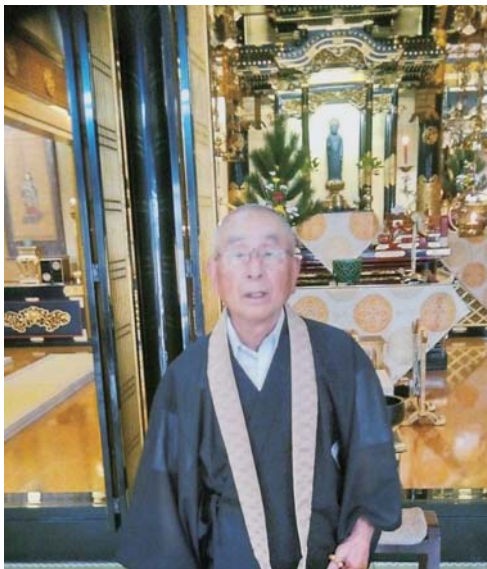
『戦争体験に学ぶ会』

(かほく市内高松 即生寺)

北朝鮮からの逃避行

去る七月二十日、かほく市内高松真宗大谷派即生寺にて「戦争体験に学ぶ会・全戦争犠牲者追悼法要」が今年も開催された。

第一部戦争体験に学ぶ会では、当寺前住職(松尾正寿)が、八十年前の終戦直前、二十一歳で北朝鮮清津府の中学校教員に成りたての坊城百合子さんがソ連軍侵攻から逃れ、九か月半恐怖や飢えや病に苦しんだ逃避行の模様を、同氏著「曲がり角に菩薩」を基に語った。その一部分を以下に記す。



即生寺 前住職 松尾正寿

池里さんとの出会い 文坪にて

見ず知らずの六人を池里さん夫婦が、「さあ、さあ」とまるで待ってでもいたかのよう
に迎え入れて下さった。立っているだけで精
いっぱい私が、池里の小母さんの温かい晴
れやかな声をどれほど嬉しく懐かしく思った
ことか。池里さんの一家は夫婦と十代の子供
三人、家は二部屋に台所の鉄道員官舎で、私
たちは突き当りの六畳間に通された。

やがてちゃぶ台に炊き立てのご飯と熱い味
噌汁、人参の味噌漬けが並んだ。一か月近く
流浪して来た身には夢のようなもてなしだっ
た。人参の赤い色がまぶしい程に美しく、ご
飯も味噌汁も湯気を立てていた。難民の私た
ちのためにわざわざ揃えて下さった情けが身
に沁みて涙が出そうだった。

部屋いっぱい蒲団が敷かれた時には皆、
声も出ないのだった。畳でさえ撫でて喜んだ
のに、綿の布団で身体を休められるとは！
ついえ去った家庭の温もりが夢のようだっ
た。

私は床に就くなり気を失ったのであろう
か、それから三日間は昏睡状態になったよう
である。意識が朦朧として霧の中をさまよ
い、ただ朝出かけては夕方帰ってくる人の気
配をおぼろげに感じていたような気がする。

深夜、ふと目が覚めた。窓から月の光が
煌々と差し込んでいる。今夜は満月なのか。
仲間たちがぐつぐつと眠っている。

一体私はどれだけ眠っていたのだろう。思
いがけなくも池里さんのご厚意で夕飯を戴
き、蒲団に身を横たえてから長い時間が過ぎ
たような気がする。今は物音ひとつなく、家
の中もしんと静まり返っている。この世の全
てが眠っているような深い静寂。この月明か
りの中で、私は自分の死が近いことをひしと
感じた。清津を脱出してから有為転変は極
まりなく、逃避行を重ねた末にこうして見知
らぬ町で病み倒れた。父も母も、兄も姉も、
弟も妹も友達も、誰一人として知られずに死
ぬのか、と思った時不意に涙が溢れ出た。そ
して「死ぬのはイヤ、死にたくない」と声を
出さずに叫んでいた。毎朝神仏を拜んで育っ
たことは何の救いにもならず、怒涛のような
悲しみの中で、ただひたすらに恐ろしかっ
た。絶望の端から底の見えない谷を覗き込む
ようなゾッとする恐怖に震えた。死とは黒一
色の闇、その闇の深い空洞に一人で落ちてい
くこと。

明日にはどこかの道端で倒れてそのまま落
ちていくのだろうか。二度と浮かび上がれな
い果てしない無限の闇へ。でも自分にはもう
生きるための術が無い。医者も薬も食べ物も

身寄りも。底なしの泥の中に吞み込まれていく孤独と絶望で、蒲団に顔を押し付け声を忍ばせて泣いた。

どのくらい泣いていたのか、三日間休んでいた腎機能が働きたして、そろそろと立ち上がりよろめきながら用を足しに行ったその帰り、廊下のガラス戸を通して池里さん一家の寝姿が見えた。何と。座布団やコートを被って横になっておられる。座布団一枚では足も肩も出る。コートも身体を覆うことは出来ない。自分たちの蒲団を全部難民にさせて、一か五人がこの北朝鮮の秋の夜を手足を締め背を丸めて眠っておられる。

夜が明けてから皆に昨夜目にした池里さん一家のことを話した。皆うツと絶句し、目を伏せてうつむいた。

朝ご飯をいただいて終日汽車を待ち、また帰ってきて夕ご飯をいただき蒲団で寝る。それがどれ程申し訳なく心苦しいことか十二分に分かつてはいても、つかの間の安寧から再び恐怖と苦難の逃避行に踏み出すには勇気が要った。

でも、もうこれ以上甘えてはいけない、皆で出よう、と話し合いはすぐに決まった。

一人ずつ手について礼を言った。お礼の言葉をやどみなく述べる人、声も出せず深々と頭を下げる人、だれも皆感謝の思いは言い尽

くせない。池里さんの一家も並んで座り、目礼を返して下さった。小母さんが「どうか元気で内地に帰れるように祈ってるよ」と言われるなり

「まさとし！お前、そのシャツを脱げ！」

側に座っている息子さんの木綿のワイシャツをむしり取るようにして脱走兵に着せられた。

私はもう野垂れ死にを想って泣いた昨夜の私ではなかった。私の魂は池里さん一家の慈悲の心に触れて浄められ、澄んで平安になっていた。最後に私がついて御礼を言おうとした。感謝の言葉は胸に溢れ、ほとんど声にならなかったが、その時突然

「父ちゃん！この姉ちゃんを助けて！」

小母さんが悲鳴のように叫ぶと、同時に身を投げ出して畳にひれ伏した。それからゆると体を起こすと、自分に言い聞かせるかのようにゆっくりと言った。

「おかゆをすすってでも、この姉ちゃんを、一緒に内地に連れて帰ってちょうだい、おねがいします」

異国に残された敗戦国の民には今後どれ程の苦難が待ち受けているのか、想像することもない。明日にはこの官舎を追われて自分たち一家も逃避行の旅に出るのか、無形の鎖につながれてこの異国を流浪するのか。こ

んな時に死に瀕した病人を抱え込めばそれほど家族の暮らしが圧迫され痛い犠牲を強いられるか、叔母さんには存分に分かつていながら、それでも救わずにはおれないという慈悲の心を身体いっぱい現わして、真剣にそして悲しげにじつと小父さんを見つめていた。

この光景は私の生涯を通しての心の灯となっている。私が浄土に還る時は最後に必ずこの時の事を思うであろう。

こんなことがあるのか。誰もが凝然として沈黙した。この極限の非常時に、見ず知らずの病人をだれが抱え込めようかピンと張りつめたその空気と時間を断ち切るように

「よし！ 今日から家の娘だ！」小父さんが決然と言われた。……………

坊城百合子さんは、飢えに耐え、マラリヤ再発にも打ち克つて昭和二十一年両親の郷里石川県に引き揚げる。

大正十二年（1923年）羽咋郡出身の両親のもと植民地北朝鮮清津に生まれる。

昭和十八年（1943年）九月、広島県立広島女子専門学校卒業。

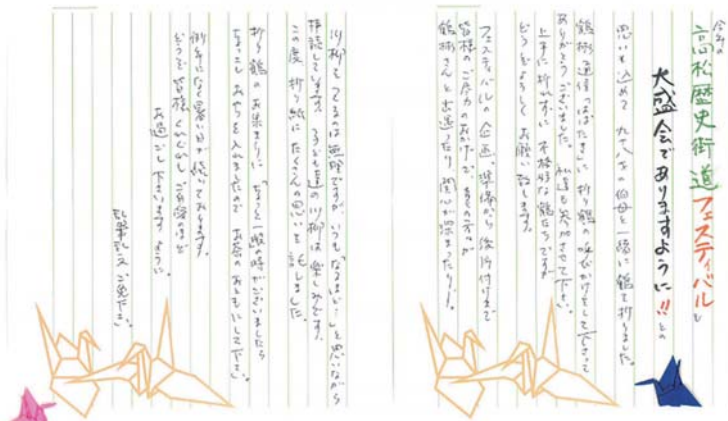
昭和二十五年（1950年）石川県立高校教員となる。

昭和五十三年（1978年）石川県立女子専門学校退職。

レポート①

平和と復興への祈りを込めて 折った千羽鶴を能登へ

鶴彬を顕彰する会では、今年の2月からたかまつまちかど交流館で「折り鶴教室」を開いています（詳細ははばたき48号をご覧ください）。様々なグループや個人のかたが協力してくれて、千羽鶴もたくさん出来上がりました。また、福島在住の石井いづみさんからもお手紙とともに折り鶴が届きました。ここに紹介させていただきます。



石井いづみさんからいただいたお手紙

今年の高松歴史街道フェスティバルも大盛会でありますように!!との思いも込めて九十八才の伯母と一緒に鶴を折りました。

鶴彬通信「はばたき」に折り鶴の呼びかけをして下さってありがとうございます。上手に折れずに不格好な鶴たちですがどうぞよろしくお願い致します。

フェスティバルの企画、準備から後片付けまで皆様のご尽力のおかげで、多くの方々から鶴彬さんと出遇ったり、関心が深まったり！

川柳をつくるのは無理ですが、いつも「なるほど」と思いながら拝読しています。子ども達の川柳は楽しみです。この度折り紙にたくさんさんの思いを託しました。（中略）例年になく暑い日が続いております。どうぞ皆様くれぐれもご自愛のほどお過ごし下さいますように。乱筆乱文ご免下さい。



石井さんからいただいた
折り鶴

4月23日 皆月多目的集会所



6月10日 道下第2仮設住宅集会所

さて、顕彰会の事務局である遠田、喜多、平野は昨年に引き続き、今年も炊き出しのボランティアのお手伝いに、輪島市門前町の仮設住宅や公民館に行っています。今年はボランティアに行くのに折り鶴を持参して被災地の皆さんにお渡ししております。



8月21日 浦上公民館（あすなろ交流館）

私たちはいきなり千羽鶴を渡すのではなく、まず「折り鶴通信」をお渡しして、どこでどのような人たちがどんな目的でこの折り鶴を折ったのかを丁寧に説明し、ご迷惑にならないかを確認した上で千羽鶴をお渡しするようにしております。

（平野記）

当鶴彬を顕彰する会は、戦後・被爆80年平和を願うネットワークの呼びかけに呼応し、8月1日（金）～15日（金）石川県庁19階展望ロビー・交流コーナーを会場にした「平和のパネル展」等の多彩なイベントの開催企画の一環として「反戦川柳作家 鶴彬パネル展」（12枚のパネル）として参加しました。



反戦川柳作家 鶴彬パネル展

レポート② 石川県庁19階で 鶴彬のパネル展

同会場・同期間に、日本中国友好協会石川支部の村瀬守保写真パネル「一日日本兵が撮った日中戦争」と治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟石川県本部の「治安維持法制定100周年パネル展」も併せてありました。2週間の開催期間中に多くの県民に観ていただきました。

（板坂記）



反戦川柳作家 鶴彬パネル展



「彬」に本名が 隠されている

「鶴」は一般的に恩師 井上剣花坊・信子夫妻の次女＝鶴子からといわれているが、「彬」は、地元高松で以前から言い伝えられている説がある。

鶴彬の名前の由来

寺内 撤乗（鶴彬を顕彰する会会員）

鶴彬（本名・喜多一二）は、デビュー時、「喜多一児」というペンネームを使用していたが、特高警察に目をつけられるようになった時期、一瞬「山下秀」を名乗り、最終的には「喜多一児」を捨て、「鶴彬」を名乗った。

「鶴」についてはここでは割愛し、「彬」についての面白い説があるので、簡単に紹介したい。

「彬」は、現在では中尾彬や大仰彬など有名人の名前にもみられるが、鶴彬以前に生ま

れた有名人といえば薩摩藩主の島津斉彬しかみられない珍しい漢字である。鶴彬が、なぜわざわざ当時として

という字を使ったのか。鶴彬が西郷隆盛を育てた島津斉彬を尊敬していたとは考えにくく、また長州藩出身の井上剣花坊を意識して「彬」としたというのも説得力を欠く。考えれば考えるほど謎は深まる。しかし、この答えは意外な所にあつた。

何年も前のことだが、誰に教えてもらったかははっきり覚えていないが、川柳をしている或るご年配の方から「彬」に鶴彬の本名である「喜多一二」が隠されていることを教えてもらった。

「木」が二つで「キ多」つまり「喜多」「彬」で、「一二」となる。その説明を聞き、私は「なるほど」と思った。

では、その方がこれの発見者かといえば、そうではなく、その方も何年も前に知人が見つけたのを知人から教えてもらったとのこと、今となつては誰が第一発見者なのか分からない。鶴彬は「鶴彬」の中に「喜多一二」を残しながらも、世の中に「俺の正体を暴いてみる」という「なぞ解き」を出していたのかもしれない。

（つづいて）

鶴彬資料室も案内する

《富士国際旅行社》

平和や環境保護、人権をテーマにスタディーツアーを企画展開する旅行社がある。創業以来六〇年の「富士国際旅行社」で、能登地震をきっかけに、能登への旅行を斡旋し志賀原発、珠洲原発跡地、内灘米軍試験場跡地などを案内し、高松の鶴彬資料室も訪れる。

創業者は終戦時の玉音放送を担当した元日本放送協会の柳沢恭雄氏。経営理念は「平和な世界、民主的な社会の実現に貢献」。社員は4人。沖縄への高校の修学旅行の添乗もする。最近では台湾海峡・金門島にも足を伸ばす。先年被曝者が国連軍縮特別総会で演説した海外活動なども長く陰で支えた。この旅行社への情報提供に内灘町の元町議会議員・水口裕子さんも協力、鶴彬資料室にも同行し内灘米軍試験場跡地の案内も行つておられる。



▼写真は朝日新聞「ひと」欄で紹介された社長の太田正一さん（56）。

Ⅱ新情報Ⅱ

鶴彬が収監された「衛戍拘禁所」の内部

えいじゅこうきんしょ

元金沢城跡は戦時中、日本陸軍の第九師団歩兵七連隊があった。戦後、第四高等学校（金沢大学）となり、城跡の大学として世界的にも希有で、多くの学者や文化人を輩出した。

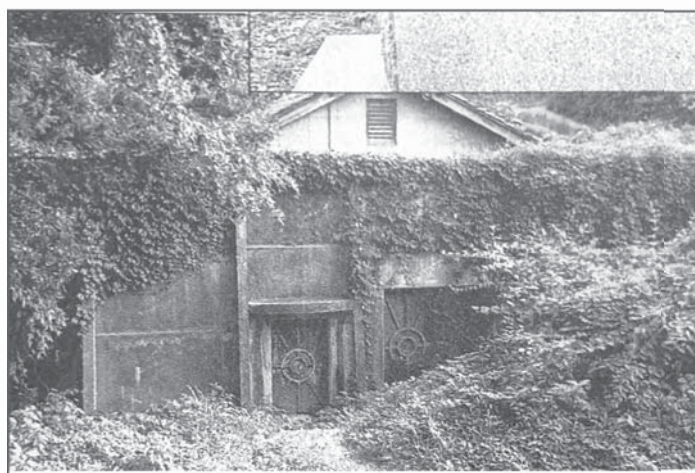
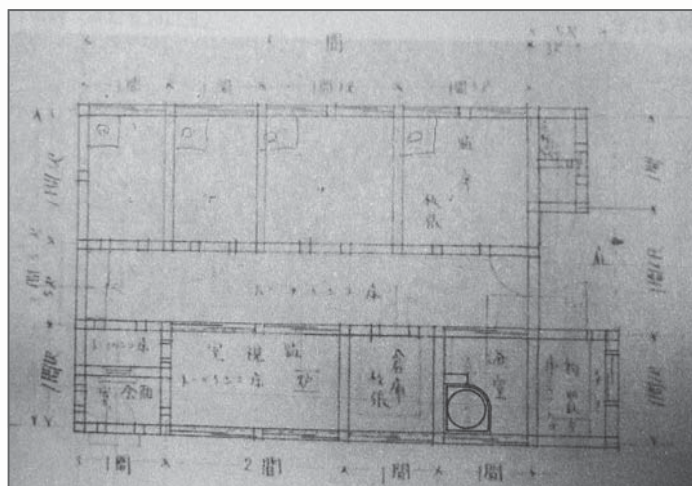
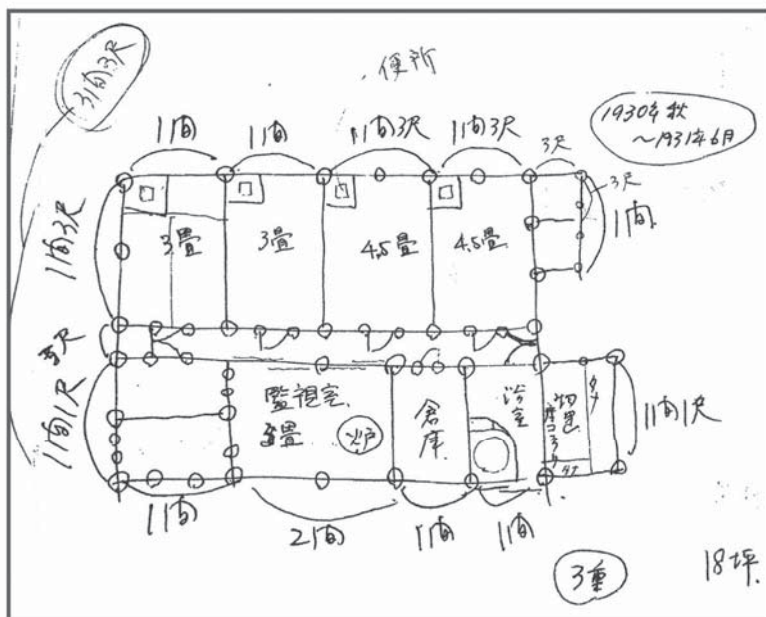
喜多一二（鶴彬）が反軍活動で逮捕され拘束、拷問などで調べられた「衛戍拘禁所」は二重の堀に囲まれツタに覆われ、大学が移転し金沢城公園として整備されるまで大学の施

設として使われていた。最近知人からこの施設で動物実験をしたことがあると連絡があり、「衛戍拘禁所」の内部の図面を書いてもらった。

建物は18坪。入口から中央に3尺（1m弱）の廊下があり、右側に四畳半の個室2、三畳の個室2。左側に浴室、監視室、倉庫などがあり、浴室には1mほどの五右衛門風呂？があることが分かる。

この元衛戍拘禁所は1993年金沢住宅地図に「法文学部心理学研修室 動物実験室」とあり、その後金沢城公園整備によってこの場所に金沢城公園トイレが設置された。

鶴彬が衛戍拘禁所に入れられたのは、1930年3月の「連隊長質問事件」、翌31年「金沢第七連隊赤化事件」で収監、この事件で大阪衛戍監獄に移監（刑期1年8カ月）。大阪の衛戍監獄は大阪城内にあり、大阪城公園整備に伴い、大阪あかつき川柳会の努力で鶴彬顕彰句碑が建てられた。刻まれた句は「暁を抱いて闇にゐる蕾」（W）



こんな姿で建っていた元衛戍拘禁所(1987年)

鶴彬資料室 蔵書紹介

その①「諷詩人」(石原青竜刀)

「鶴彬資料室」は鶴彬に関連した膨大な第一級史料が保管されてます。

特に戦後すぐに鶴彬の存在が世に紹介されるきっかけになった様々な出版物が保管され、戦後川柳史を知る上に欠かせないものがたくさんあります。国立国会図書館にもなく、高松の資料室にしか残されていないものもいくつかあります。

「諷詩人」

(創刊号〜54号)

これは1960年創立された諷詩人同盟の機関誌である。ガリ版刷り。



創刊号(A5判24頁) 1960年2月



代表の石原青竜刀氏は戦前、中国に30年満州鉄道系列の華北交通に勤務し、中国の文芸誌に執筆。戦後帰国し多くの文芸誌に川柳欄の選者などとしていた。日本文化についての造詣が深く、「川柳の神髄は風刺にある」として、「諷詩」の呼称を提唱。民族短文芸の最高峰をめざし「俳句でも川柳でもない川柳非詩論」を展開。「諷詩人同盟」を設立、多くの賛同者を得た。また1969年「よみうり時事川柳」の選者となり、伝習の定型にこだわらぬ、型よりも内容と精神、その句にふさわしいリズムを有しているかを選考基準にして、多くの新人を育てた。しかし既存定型川柳界からの批判もあり、1978年3月新聞社当局より「4月から紙面刷新をはかるため」の宣告で選者を去る。

彼の残した「諷詩人」は彼の死去(81歳1979年9月5日)で廃刊することになる。

資料室には「諷詩人」の創刊号から54号(1979年)が保管されて

います。この資料は故岡田一杜^{いっと}氏本人から鶴彬資料室完成の際、寄贈されたものです。この資料は川柳や川柳史を理解するために必見の資料である。

石原青竜刀の川柳

華北交通の社員会誌『興亜』に、戦時の満州でみた日本人を描いている。酔っ払ってあたりをどなりちらしている「盟主日本人」を揶揄した句を発表。

- 東洋の盟主ださうな千鳥足 (1931)
- 徳はなし況んや言語不通をや (1931)
- 落書きも支那は一首の詩をしるし

(日本の兵隊が中国に行つて驚いたのが落書き。どれも見事な筆跡の詩であつたという。)

- 「考えない葦」ジグザグとせめられる
- 夢ならぬ過去や黄土のしみいくばく
- 神武以来食えぬ人あり放つとかれ

(1957)

- 支那通りの辞書になかった国が出来

(1966)

- 墓標かと見れば国会議事堂です

(1970)



石原青竜刀
(1965 金沢市にて)

鶴彬・交流の広場

■ 6月4日、17日、22日、たて続けに鶴彬資料室に訪問者がありました。

こんな過密な訪問はじめてかもしれません。訪問されたのは「富士国際旅行社」というスタディーツアーを企画する会社が募集した御一行様でした。(富士国際旅行社について18ページに紹介)

今年が平和を考える歴史の節目ということもあるでしょう、富士国際旅行社が意識的に企画を組んだのかもしれませんが。特に昨年来の能登地震と志賀原発や建設計画が白紙になった珠洲原発を一体に考え、被災現地を視察、応援を兼ねて学ぶことになりました。



浄専寺境内の墓碑・句碑の前（6月4日）



鶴彬生家の前（6月4日）
碑の右側が鶴彬の従甥 喜多義教さん



高松歴史公園の鶴彬の句碑の前
右から3人目の水色の帽子をかぶっておられるかたが水口裕子さん（6月4日）



卯辰山・玉兎ヶ丘公園の「平和の子ら」像の前
(6月17日)



たかまつまちかど交流館3階の鶴彬資料室
右端で資料を手になっているのが、
顕彰会の渡辺寛事務局員（6月4日）



卯辰山の鶴彬顕彰句碑の前（6月17日）

旅行社に情報提供された元内灘町議員・水口裕子さんも米軍試射場跡地や内灘郷土資料館を案内、金沢卯辰山の鶴彬顕彰句碑にも足を伸ばしていただきました。

9月に入っても多数のスタディーツアーの方々が訪問される予定です。
(渡辺記)

■ 6月15日、金沢で治安維持法について講演された萩野富士夫先生が、鶴彬を顕彰する会の副会長である板坂洋介さんと鶴彬資料室を尋ねて下さいました。

鶴彬は治安維持法で逮捕され、最後は豊多摩病院で亡くなりましたが、先生は現在、その病院の近くにお住まいでした。

資料室には、当時の地図が貼り付けてあるのですが、「ここに陸軍中野学校があったのですよ。今は…」とか、いろいろ教えていただきました。



当時の地図を見ながらお話し下さっている萩野富士夫先生

「現在、治安維持法と同じような法はあるのですか？」とお尋ねしたところ、
「30年前にオウム真理教に適用されそうになった破防法ですね。でも、破防法はみんなから結構マークされていてなかなか適用するのが難しいので、また新たな法を作ろうとするでしょうね、気を付けないと。犯罪捜査のための通信傍受に関する法律など諸々も危ないといえれば危ないですね。それから…」とお答えくださいました。



まちかど交流館3階鶴彬資料室にて
萩野先生と並んでいるのは、顕彰会の板坂洋介副会長

私は鶴彬を顕彰する会の事務局長をしているおかげで、いろんな活動や研究をしている方々と知り合いになります。大変、役得です。

浄専寺境内にある墓碑にもお参りいただき、

胎内の 動き知るころ 骨がつき

の句碑の前で、板坂さんに写真を撮っていただきました。
(平野記)



浄専寺境内の鶴彬の墓碑と句碑の前
左側は顕彰会の平野喜之事務局長（浄専寺住職）



左から遠田、神山監督、平野
監督の手にたかまつまちかど交流館で折った千羽鶴

■8月24日、滋賀県愛知郡愛荘町安孫子のハーティーセンター秦荘大ホールで開催された「第29回仏教徒平和のつどい」に、顕彰会事務局の遠田勝良さん、喜多義教さん、そして私の三人が参加いたしました。

第一部は全戦没者追悼法要、第二部第一は映画『鶴彬—こころの軌跡』、第二部第二は神山征二郎監督の御講演でした。

開演は13時半からでしたが、私たちが会場に到着したのは11時半でした。まずは神山監督にご挨拶をするために、講師控室に伺いました。



安孫子のハーティーセンター秦荘大ホールで
講演中の神山監督

控室では神山監督から、今回の安孫子での「仏教徒平和のつどい」の講演の講師に監督が呼ばれた経緯をお聞きすることができました。

監督のご実家のすぐ近くに専宗寺という浄土真宗本願寺派（西本願寺）のお寺があり、監督の御尊父、御祖父様はそのお寺の門徒代表を務めておられたそうです。その専宗寺の先代の坊守（御庫裏）さんは安孫子のお寺から嫁がれ、監督のお母様の葬儀式には、安孫子のお寺からも僧侶がお参りに来られたということで、安孫子のお寺と監督とは深いご縁があったのでした。



会場入り口付近のテーブルに飾った千羽鶴、
はばたき、フェスタのチラシ、リーフレットなど

会場の入り口付近のテーブルに、たかまつまちかど交流館で折った折り鶴を飾り、今年のフェスタ（9月14、15日）のチラシや会報「はばたき」、鶴彬川柳大賞のチラシ、鶴彬のリーフレットを置きました。つどいが終わったあと、ほとんどなくなっていましたので、持って行き甲斐がありました。

映画の上映中に泣いておられた方をお見受けしました。私は監督のお話の中で「戦争が終わらないのは戦争で金儲けをしたい人たちがいるからだ」という言葉を聞き、なるほどと思いました。車で片道3時間半はかかりましたが、参加できて本当によかったです。

財政の現状報告

顕彰会 財政係 小山 広助

年間の主事業は①機関誌「はばたき」発行です、会の発展には重要な武器です。支出の現状は印刷、発送費などの高騰があり発行回数の減も考慮しています。②フェスティバルの開催です、今年は「鶴彬川柳大賞」第30周年記念大会として昨年から準備をしてきました。事業を実施する財政状況は、収入は会員の会費、購読料、物販売上ですが、会の運営費と機関誌発行するだけの収支です。毎年開催するフェスティバルの財源は寄付金収入を頼りにしてきました。

今年の事業「鶴彬川柳大賞」は昨年から準備をして、県と市の地域文化活性化事業に応募し財政補助を予定していました。審査の結果、事業は補助金対象になりませんでした。フェスティバル事業は先行して進めて来たので予算上収入の目的が立たないが事業変更せずに実施することになりました。

本年度も寄付金収入を財源として会員以外からも広く寄付金を募ることになりました。目標は50万円、現在までに15万円の寄付金を戴きました。本当にご支援感謝申し上げます。財政状況の一端を報告いたしました。

編集後記

鶴彬を顕彰する会事務局 平野 喜之

今年は、「鶴彬川柳大賞」応募30周年ということで、高松歴史街道フェスティバルに向けて新しい企画をしました。たとえば、フェスタ1日目(9月14日)のかほく市民川柳祭の表彰式の前には、はまなすコーラスや高松少年少女合唱団の合唱を予定しております。そのご縁もあってか、高松少年少女合唱団の主宰者である櫻井晴美さんは「はまなす通信」に鶴彬のことを連載で書いて下さいましたし、高松少年少女合唱団の子供たちがたかまつまちかど交流館で折り鶴を折ってくださいました。

フェスタ2日目(9月15日)には白山市のフォークグループの「でえげっさあ」のコンサート、冬のトさんの「鶴彬と大阪を歩けば」という講演も予定しています。

このように新しい企画盛りだくさんの今回のフェスタですが、この同じ頁(上段)で小山広助さんが書いてくださったっているように、県と市の地域文化活性化事業に応募し補助金をいただけたらと思っていました。結局補助金の対象にはなりません。しかし補助金がなくても行事の予定を変更しませんでしたので、顕彰会の財政状況が非常に厳しくなりました。

財政状況が厳しいのはどんな人でもどんな会でも同じだとは思いますが、寄付金でのご支援、よろしくお願いいたします。

鶴彬を顕彰する会



問い合わせ先



「はばたき」
ダウンロード



鶴彬という人



■発行 鶴彬を顕彰する会

■事務局 〒929-1215

石川県かほく市高松ツ66 浄専寺 (平野喜之 気付)

TEL・FAX 076-281-0546

携帯TEL 090-8209-3679

■E-mail: yoshiyuki.h.1192@gmail.com

■ホームページ <http://tsuruakira.jp/>

◆会員募集◆(随時受付)

*年会費3,000円(団体3,000円)

3,000円には「鶴彬通信 はばたき」購読料含む

*「はばたき」購読のみの場合は2,000円/年

郵便振替口座 00740-5-75480

加入者名 「鶴彬を顕彰する会」